詠む広場

毎日俳壇

井上　康明　選

亡き人に季節はあらず春の雷
直方市　岩野　伸子

△評▽かけがえのない人が亡き人となって、季節のない世界にいる。あえかな春雷が、亡き人を悼むかのように、春の到来を告げる。

大寒の船渠火のこゑ鉄の声
周南市　九内　千沙

△評▽船渠はドックの意。大寒の日、鉄が組まれ、溶接の火花が散る。寒気をついて造船は進む。

蠟梅の星空に枝張ってゐる
甲府市　清水　輝子

ぬばたまの夜の底から嫁が君
浜松市　久野　茂樹

谺して高層階を初鴉
相模原市　小山　鞠子

風花のたちまち消えてアスファルト
甲斐市　松田　健嗣

初場所や土俵の円といふ無限
加古川市　伏見　昌子

蕓苞を解くや寒鯉をどり出づ
名古屋市　可知　豊親

佇むあり急ぐもありぬ朽葉径
小平市　中澤　清

歎異抄座右にありて冬座敷
唐津市　梶山　守

片山由美子　選

行けば行くところに用や十二月
東京　草野　准子

△評▽あれもこれも片づけなければと思う年末。予定していなかったことまでこなす慌ただしさが伝わってくる。

富士山の遠くに見えて寒に入る
白岡市　福沢　繁

△評▽ふだんは見えない遠くの富士山がよく見えるのである。真冬の透徹した空気が感じられる。

引き返し鯛焼を買ふ列につく
松山市　村重　香霞

煤逃げや山手線をひとめぐり
東京　福島　照子

修復の灯台真白冬怒濤
和歌山市　中筋のぶ子

冬桜しかと光を受け止めて
越谷市　安居院半樹

かまくらや家族のやうに集まりぬ
相模原市　はやし　央

巡視船碇を沈め去年今年
茨城　矢次　洋平

冬の蠅己が重さに震へけり
名古屋市　平田　秀

縄跳びを百回とんで冬休み
川越市　石田浩二郎

小川　軽舟　選

毛糸編むすなはち星座編むごとし
松本市　上月くるを

△評▽誰かのために模様の入ったセーターを編む場面を想像する。「星座編むごとし」と大きく飛躍した比喩が楽しい。

尻ちぢめ譲り合ふ席おでん酒
東京　伊藤　公一

△評▽縮むはずもない「尻ちぢめ」がユーモラスで、人情味のある句になった。

教室の達磨ストーブ父情あり
香川　佐藤　浩章

読みかけの薄き洋書や冬菫
神戸市　細井　紗良

歯ブラシを二本下ろして年用意
名古屋市　山内　基成

着ぶくれて重たき影を引きにけり
西尾市　金子　恵美

下駄箱に錆びしアイゼン山眠る
善通寺市　合田　豊

日向ぼこ太陽系の地球にて
伊勢市　奥田　豊

着信に咥えて外す手套かな
君津市　本吉　孝雄

階段が年々長し初詣
前橋市　西村　晃

西村　和子　選

葉牡丹やぎしぎし太る音がする
白井市　毘舎利道弘

△評▽葉ボタンの咲こうとする勢いと充実感とが聴覚によって現された句。きっとみっしりした大輪の花を咲かせることだろう。

鱈ちりにするか耳うつ風の音
姫路市　板谷　繁

△評▽今夜は寒くなりそうだ。こんな日はタラちりが食べたい。味覚は季節に直結している。

高々とヘリ渡りゆく初御空
葛城市　八木　誠

宇治橋を渡り切る間の時雨かな
名古屋市　可知　豊親

江の島を揺るがしてゐる冬怒濤
武蔵野市　渡辺　一甫

鉄砲打ち上座に据ゑて薬喰
盛岡市　福田　栄紀

祈るしかないとつぶやき燗の酒
横浜市　正谷　民夫

本紙より折り込み厚し年の暮
三郷市　村山　邦保

赴任地は国境の島鶴仰ぐ
佐世保市　相川　正敏

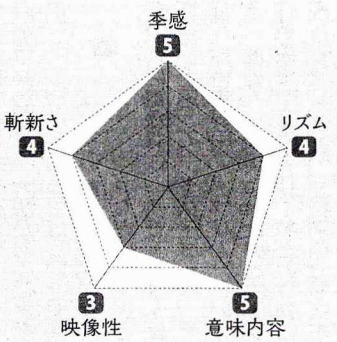
後ろ影祖母に似ているちゃんちゃんこ
明石市　村上　絹恵

俳句てふてふ　注目の一句

やまびこを返し尽くして山眠る

円堂実花

チャートで採点



季語「山眠る」の一句。「冬山惨淡として眠るがごとく」という漢文の言葉がもとになった、草木が枯れ、しんと静まりかえった冬の山を擬人化した季語です。

掲句ではその山を、さらに人間らしく表現しました。きっと冬以外の季節には、多くの人が訪れる場所なのでしょう。登山道に人気のヤッホーポイントがあるのかもしれません。「返し尽くして」がそのにぎわいを伝えると同時に、訪れる人が激減した冬の静けさを強調します。まるで、はしゃぐ人間たちに律義にやまびこを返していた山が、ようやく最後のひとつを返し終え、やれやれと深い眠りについたかのよう。人間的でおかしみがあり、童話の一場面を思わせます。

（えんどう・みか＝俳人）

アプリ
俳句てふてふ

全国景勝地俳句コンテスト　俳句てふてふは富士五湖や耶馬渓など133景勝地にちなんだ俳句を募集中。1930（昭和5）年に高浜虚子選で実施した「日本新名勝俳句」の後継企画。選者は俳人の稲畑廣太郎さんと星野高士さん。詳しくはアプリ内の応募要項をご覧ください。

アプリのダウンロードはこちら